校註

日本文學大系

第六卷

源氏物語（上卷）

校註

日本文學大系

第六卷

大正十五年二月二十五日印刷
大正十五年二月二十八日發行

日本文學大系
第六卷

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
二一八八番
振替東京五二二九八番

解題

文學博士　尾上八郎

源氏物語

日本文學といふ名は大きい。しかしそれの代表として擧ぐべき作品は、あまり多くはない。その多からぬ作品中に、決して漏すべからざるものは、源氏物語である。否漏すべからざるのみならず、他の作品の一二を棄てても必ず擧げねばならぬものは、この物語である。日本文學を一條の水平線狀に描いてみると、その線條は、必ず二個處の隆起をもたねばならぬ。その隆起の一は平安朝時代であり、その二は江戸時代である。その二隆起の高さの優劣は、直ちに論定するのは困難であるが、猶それらは他の個處と異なる著しい特色を存し、共に、他の谿谷的の時代を瞰下して、優に王座の高さをもつてをるのである。江戸時代のそれが、西鶴、近松、馬琴等の諸作品によつて成るとともに、平安朝時代のそれは、貫之、清少納言、紫式部等の諸作品によつて出來

てゐる。而して、この紫式部の製作品たる源氏物語は、その時代の代表中の代表として立たねばならぬ。この亭々たる風姿に對しては、貫之、清少納言、その他の作品も、侏儒に等しい觀がある。まことにこの物語は、平安朝時代の文學中の驚異である。否日本文學の驚異である。

平安朝の物語は、この物語に、物語のいできはじめの親といふ竹取物語よりはじめて、伊勢、うつほ、大和、落窪など、現存のものがあらはれた。その外に猶あつた事は、その書名の存在によつてのみ知られるのである。その中の竹取は、天界の女性が、たま〳〵人間に交はつて、幾多の男の心を惱ましつゝ、また上天するといふ、甚だ浪漫的なものであり、伊勢は、風流で優美な男子が、あまたの女性に關係して、情的生活を恋にするといふ、極めて寫實的なものである。この明らかに看取せられる浪漫的、寫實的の兩傾向が、漸次相合してうつほ物語を作り出した。うつほは、最初の一卷は、俊蔭が渡唐の途中の難風や、波斯の國の遍歴をうつし出して、竹取の如く浪漫的である。しかし、次々の諸卷は、俊蔭が歸朝して後の情態や、その孫の仲忠の生立や、出世や、戀愛や、すべて寫實的である。故にこのうちでおもきをなしてゐるのは、寫實的描寫である。故に、浪漫的の味が漸次衰へて、寫實的傾向が盛んになつて來た事を、明示して居る。この傾向を襲つたものは、落窪の類であるが、それを更に擴充したものは、源氏物語である。しか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

も、これは驚くべき大冊で、遙かにうつほを凌いで、五十四帖にも達してゐる。而して、勿論寫實的に、當時の情念偏重の傾向を遺憾なく描き出すべく企畫したのであるが、又時々變幻奇異の場面を展開して、浪漫的の匂をも多分に含ませてゐる。當時はこの物語にも引いてある類の物語が多數に存在してゐたのであらう。從つて作者は、從來のもの及びそれらの長を採り短を補ひ、綜合し統一して、その上に自己獨得の描寫を加へて、當時の人物、事件、而して社會を、見るが如くに描き出したのであらう。元來作者の生時または後世に於て、多數の人々に讃美せられ、賞揚せられるものは、純然たる獨創的のものではない。他と離れての獨創は、出來るものではないが、その味の豐かなものでも、すでに世人の目より遠ざけられる。多數を基礎として立つといふのは、必ず前者の綜合および統一に加へて、幾何かの獨創を織り交ぜてあるものでなければならぬ。源氏物語の、枕草子よりも遙かに多數の賞讃者を有するのは、綜合、統一、獨創の交錯の故であると思ふ。從つて又、源氏物語の眞價は、それによつて極められるべきものと考へる。

源氏物語の作者の、紫式部である事は云ふまでもない。それは、紫式部日記に、「内(一條院)の源氏の物語、人に讀ませ給ひつゝきこしめしけるに、この人は日本紀をこそ讀み給ふべけれ。まことに才あるべしとのたまはせけるを云々。」とあり、また、「左衞門督、あなかしこ、このわたり

に若紫やさぶらふとうかゞひ給ふ。源氏にかかる人見えたまはぬに、かのうへは、まいていかでものしたまはむときこえたり。」とあるのでも、それの證とせられる。乃ち紫式部が、上東門院に出て仕へた時に、すでに源氏物語は宮廷の間に流布してゐて、公任のみならず、天皇までも御存知であつて、その人に對して、讃美賞揚の語があつた事、かくの如くであつたのである

紫式部の父は藤原爲時で、堤中納言物語を作つたと傳へられてゐる兼輔の孫である。文章生に擧げられたが、沉淪してゐた。一條院の時申文を奉つて、その中に「苦學寒夜紅淚霑襟、除目後朝蒼天在眼。」と書いた。道長がこれを見て感心して、奏して越前守に任じたといふ。その子に惟規と紫式部とがある。惟規も才氣があつて歌を能くした。旅で死に臨んで、「都にもこひしきことの多かればなほこのたびはいかむとぞおもふ。」と詠んだといふ。紫式部はその妹であつたが、幼時から聰慧であつた。惟規とともに史記を父から學んだが、兄よりも早く記憶した。父が歎じて、「これが男ならば、大したものだのに。」と云つたと云ふ。併し、極めて謹厚であつて、後、上東門院に參つた時でも「一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いと手づゝにあさましく侍り、讀みしふみなどいひけむもの、めにもとゞめずなりて侍りしに、いよ〳〵かかる事なむ聞き侍りしかば、いかに人も傳へ聞きて憎むらむ、とはづかしさに、御屏風のかみに、かきたることをだ

によまぬ顔をし侍りし。」といふ有様をしてゐた。藤原宣孝に嫁して、大貳三位と越後の辨の乳母とを生んだが、長保三年四月に、夫がなくなつて、寡居してゐたが、中宮彰子乃ち上東門院に仕へる事となつた。この時は不明であるが、寛弘二三年であらうと、紫家七論に云つてある。恐らくはさうであらう。さうして中宮に白氏文集を御教へした事もあり、道長の戸を叩いたのを入れなかつた事もあつたなど日記中に記載してある。併し、それが何時まで續いたか明らかでない。榮華物語楚王夢の、萬壽二年八月三日のところに、「大宮の御方の紫式部がむすめの越後辨。」といふ事がある。これでみると、萬壽二年の頃までは、大宮の御方に居つたと考へられる。併し、殿上花見、長元四年九月十五日の條に、上東門院住吉詣の供奉の人々の名の中に、「一の車には尼四人、辨の尼、辨の命婦、左近の命婦、少將の尼君、二の車には越後の辨の乳母、大輔、平少將、むさし、三の車には江宰相、美濃の小辨、兵衞内侍。御車の尻には宣旨、三位。」とある。三位は大貳三位である。辨の乳母と大貳三位はあつても、親の紫式部はない。必ず參るものと思はれるのが參らぬのは、その時已に死去したのであらうか。さうすると、萬壽二年――長元四年に死去したのであらうといふのが、紫家七論の說である。まことに、その以外に徵證がないから、かく推考するより外はない。この大著の作者の、生年も明らかでなく、沒年も知られないのは、文藝

を尊重しつゝも、猶政治萬能で、顯官要職の人を重視して、文藝作者を輕蔑した時代の一面を、よく語つてゐると思ふ。

紫式部といふ名は、何によつて出來たか。元來、この人の實名の不明である事は、清少納言等と同樣である。式部などといふ名は、その親か、夫か、兄か、何人かの近親が有してゐた官名から附けられるのが普通である。紫式部の場合は、誰が式部であつたか、それも定かならぬ。紫といふのも、又不明である。これを袋草子には、「紫式部と云名二說あり。一には、此物語の中に、若紫の卷を作る甚深きの故、此名を得たり。一には、一條院御乳母子也。上東門院に奉らしむるとて、吾ゆかりの者なり。哀と思食と申さしめ給ふのゆゑ、此名あり。武藏野の義也云々。」と書いてゐる。乃ち一は、若紫の卷から、二は、ゆかりの義からといふのである。更に河海抄には、「一部の內、紫の上の事をすぐれて書出たる故に、藤式部の名を改めて紫式部と號せられけり。」と云つてゐる。又同書に、「一說に、藤式部の名幽玄ならずとて、後に藤の花の色のゆかりに、紫の字に改められゝと云々。」とも記してゐる。藤原氏であるから、藤を冠するのは極めて穩當である。それが、色から紫と變つたか、或はゆかりの意義から變つたか、また紫の上からか、又若紫の卷からか、疑はしいのであるが、これも判然すべくもない。宣長は、「ゆかりの說、まさりて覺

ゆるなり。その故は、ゆかりの說による時は、紫といふ名、かの紫の上にはあづからぬことなるを、それとよそへて宣へるぞ興なる。總て、戯言は、あらぬ事を珍らかによそへていふをこそ、興とはすなれ。もし、紫の上の事を勝れて書けるによりての名ならむには、戯れて、若紫と宣へる、何の珍らしげかあらむ。」と論じて、ゆかりが紫と相通ずる。それが、紫の上にも關してゐるのに興があるといふのである。之も一說で傾聽すべきであらう。然し前掲の紫式部日記に、公任が、この人を求めて、「あなかしこ、このわたりに若紫や侍ふ。」と云つたのは、公任の創意ではなく、この人の名は、この物語の著作から何人にも知れ渡つて、若紫といへば、その人の事といふ程になつてゐた。從つて、何時となく、この人の名は紫とせられ、それが式部に冠せられるに到つたのであらう。勿論、初めは藤原氏であるところから、藤式部と呼ばれて居たかと思はれる。

この物語は、現に五十四帖ある。然し之は零本である。原は六十卷であつたといふ說がある。更科日記に五十よ帖、とあるのは、餘か四か不明であるが、明月記に(嘉祿元年二月)、五十四帖とある以上は、平安朝末鎌倉初期に、五十四帖であつた事は確實である。その五十四帖は、若菜の上下を一卷として數へることと思はれる。雲隱といふものは、名のみがあつて實はない。これは作者の深い意味の存するところとも云はれてゐるが、この名の存在も、極めて怪しい。その事

は、先師藤岡作太郎先生が力説せられてゐる。

この物語は、何時頃述作せられたものであるか。從來は、河海抄に、村上天皇の御女の選子内親王、乃ち大齋院から、上東門院へ、珍らしい草子があるかと御尋ねになると、門院は、竹取、うつほ等は目馴れてゐるから、新らしく作り出して奉れと、式部に仰せがあつたので、石山寺に通夜して、この事を祈つて居ると、折から八月十五夜の月が湖水に映つて、心も澄み渡つたにつれて、物語の趣向が心に浮んだので、忘れぬさきにと、佛前にあつた大般若經の料紙を本尊に申し受けて、先づ須磨、明石の二卷を書きとゞめた。これによつて、須磨の卷に「こよひは十五夜なりけりとおぼし出でて。」とあるといふ。後に、この罪障消滅の爲に、般若經六百卷をみつから書いて奉納したのが、今も彼の寺にあると云ふ。その後に須磨に書き加へて五十四帖にして奉つたのを、權大納言行成に淸書させられて、齋院に參らせられた。法成寺入道關白が、奥書を書いて「此物語世皆式部が作とのみ思へり。老比丘筆を加ふる所也云々。」とあるといふ。この說が世に行はれて居て、紫式部の書といへば、直ちに月前に筆を取る圖が書かれるほどにまでなつたのである。しかし、この事の荒唐である事は、今日はすでに論破し盡されてゐる。その先をなしたものは、紫家七論である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

紫家七論の著者、安藤爲章は、紫式部に關して、從來の說を誤謬として退けて、更に一新說を立てたのである。その中に、この成立を論じて、紫式部日記を引いて、寛弘五年の、公任の戲言の條、同じ六年の、一條院のこの物語を人に讀ませられる條、同年の道長がこの物語を見る條を引用して、これらによれば(一條院の事は追記であるから實は年代明瞭でない。)寛弘五六年頃にはこの物語は出來上つて、世に流布してゐたのである云ふ。然して、「今案、河海抄に、寛弘のはじめに出來てと書かせ給へるは、これらの文によりてにや。いかさまにも、長保の末、寛弘のはじめ、式部やもめずみにて、里に侍りけるつれ〴〵に作りたるか。」といふ結論を下して居る。更に作者の年齡に論及して、「寛弘五年に、道長公四十三歳にて、式部に艶言のたまひ、同六年に、渡殿の戸を叩きわび給ひしなどを思へば、いたく老嫗とも見えず。又みづからさだ過ぎたるよし書きたれば、若く盛りなる女とも見えず。榮華物語(殿上花見の卷)に、中宮威子三十一、二になりたまふを、さだ過ぎたまふと書けるをおもひ合すべし。しかれば、物語は、式部三十歳前後にて作れるなるべし。」と云つてゐる。而して、その長保の末、寛弘の初めの短日月に、この大著を成就したのは、あまりに敏速であると思はるべきを辯護して、「大和、もろこし、ともに聰敏なる人は、何事によらず、不日に其功をなすものなれば、此の物語も、思の外たやすくかけるもの

なるべし。後の人、にぶき生れつきを以て例する故に、奇妙不思議の思をなして、觀音の冥助、或は父爲時が力をそへ、或は御堂殿の加筆など、樣々の臆說を申すめり。皆式部を知らず、書を考ふるにおろそかなりといふべし。」と結んでゐる。これが極めて有力なので、大抵人々はこれに從つてゐる。實に、式部が夫に別れ、二人の子を守つて、徒然として寡居してゐた無聊に堪へ兼ね、すでに世故に通じた身であるから、その經驗、見聞の彼是をとり交ぜ、想像の絲を以て巧に綴り合はせて、この名著を作り出したものであらうとも思はれる。が、決して大齋院の御求めによつて、急に石山寺で書き出したものではあるまい。ことに宮仕の間は「一一といふ文字をだに書きわた」さなかつたといふ程謹愼して、才學を發揮しなかつたといふのであるから、宮仕中はすでに筆を著けなかつたらうとも想像せられる。併し又、宮仕中でなくては、宮中の儀式典例を知る事が出來ない。この物語中には、これらの事が數多く出てゐる。之は、宮仕中に見聞した後書き出した證であらうとも思はれる。この事を眞淵は論じて、帚木に、公私の事をも夫に云ひ合はせ、又少しの才ある人は、見聞く事が自然に心に止まるといふ樣な事を書いてあるのを見ると、宮仕せずとも、宮中の事はおのづから知られるのである。それに、學才ある人の常として、自分に關せぬ天下の政をも、上御一人の事をも、臣民の上をも考へて知つてゐる事は、他人とは異な

つてゐるものである。儀式典例の事があるので宮仕後の著作とは考へられない。と云つてゐる。

式部の宮仕は、寛弘三年の末頃であらう。長保三年に夫が死んでから、それまでに約五年である。その次の寛弘五年には、公任が已に、「若紫や候ふ。」と云つて、源氏の流布を證明してゐるのである。夫が死んでから約五年間に書き上げ、三年には宮仕し、その次の四五年の頃には、それが世に流布して人の口に膾んに上つてゐるといふのは、總てに於いて極めて速い事である。勿論この流布は、今日に於いては印刷と宣傳と頒布と極めて急速であるから、極めて容易であるが、筆寫が唯一の方法である當時では、この短時日では果して如何であらうか。よし流布の方は何とかなつたとしても、その著作が、約五年間に果して成就したものであらうか。異常の天才が折々出現する。筆を飛ばす事疾風の枯葉を捲く如きもあるであらう。住吉の社頭で、一日に二萬三千句を吐いたといふのもあり、又近く一日千首を作つたなどいふのもある。かやうな異常の人もあるが、この勢で以てしても、源氏物語を約五年間に成就せしめる事は出來まい。自分は之に對して極めて疑をもつてゐたのであつた。殊に公任が、「このあたりに若紫やさぶらふ。」と云つた語の「若紫」は、幼年の紫上を意味してゐて、盛年以後のそれではない。之をさだすぎた紫式部に擬するに、甚だ不當な如き感を抱いてゐた。從つて、公任の見てゐた源氏物語は全部ではなかつたの

であらうと思つた。もし公任が全部を見たならば、若紫とはいはず、紫上と云ふべきであつたと思つた。否むしろ、美貌で、明敏で、花といはば櫻と云つてもまだ足らぬほどの紫上ではなく、老實で謙遜で深慮があり、五月まつ花橘の花も實もうち具した明石上と云ふべきであつたと思つた。これをせずして、若紫を擧げた所を見ると、公任は明石までも見なかつたかと思はれる。乃ちこの物語は、紫式部が寡居の間に勞作したのではあらうが、宮仕の頃迄に全部出來たのではなく、須磨以前何卷までかが出來たのではあるまいか。公任はそれを見て、紫式部を若紫に推したのであらうか。勿論公任の「若紫」の次の語に式部が、「源氏にかかるべき人みえ給はぬに、かの上は、まいていかでものし給はむと聞きゐたり。」とあるから、紫上の意もあることは云ふまでもないのであるが、葵までは、大體紫の姫君とあつて、新枕以後多く紫上となつてゐる。從つて、上の意は葵以後であるが、しかしそれは猶、明石以前である。しかも、若紫とのみいふのは、更にその以前の感がある。これ等は極めて當推量であるが、或は眞を得たものではあるまいか。さうすると、この物語は、明石以前ある卷までは、寡居の中に作り、他は後々に作り出したのであらう。その完成の何時頃かは不明である。終になるに從つて、花やかさが失はれて地味になり、快活味がなくなつて陰鬱的になつたりしたのは、老年の所爲ではないかと思はれる。それのみなら

す、最後の夢浮橋は、藤岡先生も言及せられたごとく、書きさして失せたのではなかつたかとさへ思はれる。それは、平安朝時代の物語の現存のものは、大抵結末がしつかりとついてゐる。大抵は、めでたい行末が懇々と書いてある。夢浮橋はそれがなくて、たゞ薫が、人が浮舟を隠してゐるのではないかと思つたといふのみである。これでは、當時普通の大著の結末の形式に叶つてゐない。書きさして筆を擲つたと、こゝに於いて見えるのである。併しかくの如きが著者の大才の發露で、時代の型を全然打ち破つたものだ。そこに賞揚すべき價があるといふならば、全く別であるが、何人も時勢の子で、大抵は時代の型を全く破りえぬものである。これを斯くすつかり破つて、恰も今日の小説に見るが如き狀態に置いて居るといふのは、餘りの考へ過し、價値のつけ過しであると思ふ。斯くないまでも、いくらか卷中の各人の始末をつけて行くべきであつたと思ふ。この點からして、夢浮橋は未定のものであると考へる。乃ち源氏物語は、寡居の時から書き始めて、死前まで斷續はありながら、書きつゞけたものと考へる。日記には、宮仕の後は、屏風の上に書いた事もしらぬ顔をして韜晦してゐたが、遂に中宮に樂府を人の居ぬ暇に久しく御敎へ申し上げたといへば、この物語も、「人の侍はぬもののひまくに」書きつゞけて、その後年の頃までに及んだものと云はれぬ事もあるまい。

自分の以上の考は頗る古かつたのであるが、この頃手塚昇氏の説が出で、裨益するところが多い。同氏は、源氏物語の著作時代を明らかに三期に區別して、第一期を、桐壺より須磨、明石までとし、長保の末から寛弘の始頃に成つたとし、第二期を、澪標から雲隱までとし、寛弘の末から長和、寛仁の頃に成つたとし、第三期を匂宮から夢浮橋までとし、寛仁及びそれ以後に成つたとした。これは、何れもその準據とした事件、人物と連關してゐるのであるが、まことに、簡明に要領をよく得てゐると思ふ。しかし、すべてが、かくの如く明瞭に知悉せられるものであらうか。多少の疑なきを得ない。自分は猶、長保の末頃から、寛弘四五年頃までに、須磨以前位が出來てをり、その以後は、斷續的に書いて、その老年に及んで、まだ完結しなかつたものと、假りに定めておきたいと思ふ。しかし　これは、この物語の準據に關係のある事であるから、これを見落してはならぬのである。

古來この物語は、歴史的事實に準據を有してゐると云はれてゐる。何人も全然無から有を生ずる事は出來ぬのである。何等かの事實が眼前にあらはれると、それを資料とするといふことは、著作の要義である。この前提のもとに、この物語の研究者は前後左右に摸索して、種々の準據を得て、そのモデルとした人々を列擧してゐる。まづその主人公の源氏に就いてのみ見ると、河海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook